

活動の名称	フリガナ 森川里海の人と自然の好循環がもたらす海の中の森づくり		
記入年月日	活動主体(下記より1つ選択)		分野(複数選択可)
	団体		水資源・水環境
活動主体の概要			
活動主体の名称 (個人応募の場合は個人名)	エヌピーオーハウジン クロシオジッカンセンター NPO法人 黒潮実感センター		
代表者名 (団体の場合)	イシツツ サトル 石筒 覚	設立年月日	2002年10月4日
住所	コウチケンハタゲンオオツキチョウカシワジマ 〒788-0343 高知県幡多郡		
電話		FAX	
E-mail	info		
主な活動地	高知県幡多郡大月町		
組織の概要 (個人の場合は履歴を記入)			
応募担当者	(代表者と違う場合記入して下さい)		
氏名	カンダ マサル 神田 優	所属: NPO法人 黒潮実感センター 役職: センター長理事	
住所	コウチケンハタゲンオオツキチョウカシワジマ 〒788-0343 高知県幡多郡		
電話		FAX	
E-mail	info@	URL	http://www.orquesta.org/kuroshio/
応募活動の概要: (300文字以内で記入して下さい) アオリイカの資源減少をめぐる、地元柏島の漁業者とダイバーとのコンフリクトが発生。その原因が産卵場所としての藻場減少に起因すると考え、磯焼けが深刻化している海を再生しようと、栄養塩を供給する森の環境に着目した。しかし藻場再生にはかなりの時間を要するため、代替藻場として人工林の間伐に伴い廃棄される間伐材の枝葉を用いてイカの産卵床とし資源の回復につなげた。活動は地元小学生の森川海のつながり学習の一環としても位置づけ、ダイバーや漁業者だけでなく、森林組合、行政ら様々な主体が取り組む活動につながっている。さらに森林率日本一の84%を誇る高知県の山の環境保全と、豊かな海づくりに向けた取り組みも行っている。			
応募活動のアピールポイント: 海の利用をめぐるダイバーと漁業者とのコンフリクトを改善し、良好な関係につなげた。海関係者の目を森に向け、豊かな海づくりに必要な森づくりが必要との認識につながり、さらに流域全体に関係の輪が広がった。			
これまでの受賞歴: 応募は今回初めてです ※日本水大賞への既往応募歴(第) 受賞がある場合は 第()回()賞			
「日本水大賞」をどこで知りましたか?(数字に○印を付けて下さい) 1. 新聞広告 2. 官庁内ポスター ③. 河川協会ホームページ ④. 河川協会からの誘い ⑤. 国の機関からの誘い 6. 県・市町村からの誘い 7. 教育関係機関 8. 河川協会ホームページ以外のインターネットの情報 9. その他()			

活動の概要

目的：高知県屈指の好漁場である大月町柏島は漁業が盛んな場所である。しかし一方で暖流黒潮の影響を強く受ける周辺海域は造礁サンゴや藻場が広がり、多種多様な海洋生物の宝庫でもある。中でも魚類は国内最多の1150種が生息していることが明らかとなった（2013年）。

90年代後半、漁業の島にダイビング産業が参入してきたことで、漁場をめぐるトラブルが発生し両者の関係は悪化した。

本活動は有用水産物であるアオリイカ（地方名モイカ）の資源を回復させることで漁業者とダイバーとのコンフリクトを解消し、「海の中の森」としてのサンゴ礁や藻場の役割を理解し、それらの環境を維持するために森や川を保全する事の必要性を理解し、併せて有用水産物であるモイカの間伐材を利用した人工産卵床の設置と、産卵場所である藻場再生を行い、海で働く人と、子どもたち、林業関係者、行政など様々な主体が協働して森川里海の健全な循環を取り戻すことを目的とする。

内容：

気仙沼の牡蠣養殖業者、畠山重篤さんが「森は海の恋人」をキャッチフレーズに、漁師が山に広葉樹の苗を植える活動が全国各地で広がっている。これは海の栄養の源が森から供給されるため、海を豊かにするには森づくりが大切という事に起因している。

近年、海藻群落である藻場が著しく減少し、その状態が継続される「磯焼け」と呼ばれる状態が全国各地で生じており、高知県柏島も例外では無い。磯焼けの原因の一つに海藻が生長するために必要な栄養塩の供給不足が指摘されている。栄養塩の供給源である森が荒廃すると、大雨による土壌の流出に伴い森の保水力が低下し、また栄養豊富な土壌から染み出す栄養塩の供給も減少するのが原因である。但し柏島では、地球温暖化に伴う海水温の上昇により、藻食性のウニ類の増加による海藻の捕食圧の増加も問題である。

本地域における社会的課題は1. アオリイカの漁獲減 2. ダイバーと漁業者とのコンフリクト 3. 磯焼け 4. 放置林（山林の健全化）である。

藻場はサンゴ礁と同じく様々な魚介類の産卵場所、保育場、餌場、隠れ家となっており、生物多様性の維持には欠かせないため、磯焼けからの藻場の再生を行う必要がある。

藻場に産卵するアオリイカは高級食材として地元の有用水産物となっている。しかし近年の藻場減少に伴いアオリイカの漁獲量が減少しており、柏島では以前その原因をダイバーが潜ることに起因していると地元漁民から声が上ががり、漁業者とダイビング業者との対立が生じていた。しかしその後柏島においてダイバーと漁業者、地元小学生、森林組合、行政らが協働して、スギやヒノキの間伐材を利用したアオリイカの人工産卵床設置活動を行い成果が上がってきた。

高知県の森林率は日本一の84%であるが、そのうち65%は人工林である。そこには手入れが行き届かない放置林も多く存在することから、森林の整備も急務である。森林や河川から供給される栄養塩は、海の植物プランクトンや海藻類の成長には不可欠で、海の生物生産を支える元となっている。その植物プランクトンを動物プランクトンが食べ、それを小型魚が食べ、中型魚、大型魚、そして人間へと食物連鎖がつながっている。しかし栄養塩というのは目には見えず、植物プランクトンも肉眼では見えにくく、小型魚あるいはそれらの稚魚の段階になって初めて可視化することができる。

本活動では豊かな海は豊かな森からの栄養塩の供給により支えられていることを実感するために、森のエキス（栄養塩）を可視化する代表として、イワシ類の稚魚であるシラス（高知名：どろめ）に注目した。どろめの成魚はイワシ類であり高知県の県魚であるカツオの餌となる。小さなどろめから高知の森・川・里・海を見つめ直したい。

活動期間 自 2001年 4月～ 至 2019年 10月（通算 19年 6月）

上記の期間以前から一部の活動を実施していた場合はその期間と内容を下に記入してください。

活動の必要性・緊急性 :

柏島におけるダイバーと漁業者のコンフリクトを解消し、海を生業の場とする様々な主体が協力して豊かな海を育むことが必要と考える。

また深刻化する磯焼けに伴う海藻の減少を食い止めるためにも、栄養塩の供給先である森の環境保全について、「山の人」、「海の人」だけでなく「マチの人」にも森川海の関係性を認識してそれぞれが自分事として主体的に関わることで、森川里海の好循環に向けた官民一体となった取り組みが急務である。

活動の効果・社会への波及効果 :

2001年に漁業者とダイバーが協働ではじめたアオリイカの人工産卵床設置活動は、その後地元小学生の森川海のつながり学習の一環として位置づけられ、さらに近隣の森林組合、漁業組合、行政らが協働で行う「海の中の森づくり」活動へと発展した。この活動は地元メディアだけでなく全国からの注目も集め全国版で活動が数多く紹介されている。その結果、当初柏島で行われていた活動が、柏島を含む宿毛湾流域圏に広がり、また全国各地からの視察も増え、活動は全国に広がっている。

活動を実施する上での留意点、工夫された点、苦勞された点 : ダイバーと漁業者のコンフリクトを解消するため、まずは海のルール作りに着手した。しかしダイビングショップと漁協を同じテーブルについて貰うのが極めて困難だった。漁協組合長は、「漁協は組織であるから組織対組織の話になら応じるが、ダイビングショップ個人との協議はしない」というスタンスを崩さなかったため、まずはダイビングショップの組織化を図った。しかし当時はショップ間の関係が悪くでまとまりがなく、何度も組織化してはつぶれの連続であった。なんとか組織化しルール作りに取り組んだが、ルールというのは双方の言い分を100%満たすものではなく、双方痛み分けでしか決着しない。ダイバーが潜るからイカが獲れないのでダイバーを追い出すという漁業者に対し、追い出してイカが増えるかどうかかわからないのであれば、双方が協力してイカを増やす取り組みをしようと言を持ちかけ活動を始め、活動初年度から全国トップクラスのイカの産卵を実現した。その様子を水中映像や写真により「見える化」し、漁業者に報告をした。その成果以降、ダイバーと漁業者の協働作業が、学校や森林組合、行政といった様々な主体とのコラボに発展し、今では非常に良好な関係となり、かつ漁師が森のことを思うようになり始めた。

活動の今後の計画 : 海の中の森づくりでアオリイカ（地方名モイカ）の人工産卵床設置活動は今年19年を迎えた。2013年からはこの活動に関心を持つ全国の市民に呼びかけをし、モイカの里親になって貰うプロジェクトもはじめ、全国各地に里親が増えてきている。

昨年からは高知県の森林率84%をタノシミ経済につなげるプロジェクト「84はちよんプロジェクト」の一環として、「はちよんどろめとモイカの森づくり」に着手した。森が川を通じて海につながり、栄養がどのようにして海に運ばれ、自分たちの食につながっているかの映像ビデオも作成した。

森川里海の繋がりが大切といっても、森や川、海と密接に関係して暮らしている人達は社会全体からすると本当にわずか（マイノリティ）。社会の大半はまちに暮らしており、間接的にはすべて関わっているが直接的では無い。どこか他人事のような気がする。この大半の人が住むまち（マジョリティ）の考えがその方向に向かないと、世の中の大きな流れにはならない。そのためすべての人が関係する「食」を中心に据えることで、他人事から自分事に感じてもらいたいと思い、今後活動を高知県下のみならず全国に展開したいと考えている。

応募推薦者（必要な場合にご記入ください）

氏名		推薦の言葉 :
所属		
電話		
氏名		推薦の言葉 :
所属		
電話		